

Book Review

『中国共産党の経済政策』

柴田 聡、長谷川 貴弘 著
 発行元◎講談社
 発行年月◎2012年12月
 総ページ数◎321ページ
 価 格◎924円 (税込)



タイトルを見て「やられた」と思った。これまで中国経済を解説した書物はあまたあっても、「中国共産党」に焦点を当て、その経済政策の決定過程を解き明かそうとする試みはほとんど目にした記憶がない。評者自身、新聞記者として取り組んできたテーマであり、「ふたりの著者に先を越されてしまった」というのが正直な感想である。

本書が冒頭で読者に示すのは「政経一体システム」というキーワードだ。中国で政治が経済のあらゆる面を動かしていることは、改めて説明するまでもない。市場ではなく国家が経済の主演を演じるこのシステムの強みを、中国は2008年秋のリーマン・ショックに対応して打ち出した4兆元の景気刺激策で、世界に十分すぎるほど見つけた。

民主主義の国が絶対にまねできない大胆で素早い対応を可能にしたのは何か。本書は、①中国共産党の圧倒的パワー、②少数による意思決定、③国家の積極的な介入に関する制度的な担保——の3点を指摘する。選挙の洗礼を受けない「ごく少数の国家指導者」による政策決定が、中国経済を世界第2位の規模に押し上げる原動力

になったというわけだ。だからこそ、中国経済の行方を探るうえで共産党の人事分析は決定的に重要であり、本書もそこに多くの紙幅を割いている。

共産党の最高指導部である中央政治局常務委員会のメンバーは昨秋の共産党大会で、9人から7人に減った。8000万人を超す党員の頂点に立つ彼らは、中国の経済政策のすべてに影響力を行使できる権力を握る。そこに能力のない人物が入り込めば、国家のかじ取りはたちまち危うくなる。「激烈な競争を経て、世代ごとに卓越した人物のみが選抜されていく」とされる共産党の人事システムが、結果的に「競争と安定の両立」をもたらしているという本書の指摘は説得力がある。

中国共産党は激しい権力闘争の歴史を繰り返してきた。重慶市のトップを務めた薄熙来氏がさまざまなスキャンダルを暴かれて失脚した事件は記憶に新しい。これだけの内部抗争を続けながら共産党が権力を握り続けられたのは、優秀な人材を党の中核に残す仕組みがうまく機能してきたからだと思えてならない。

本書の著者である柴田聡氏と長

谷川貴弘氏は北京の日本大使館に勤務し、中国のマクロ経済政策に関する調査を担当した経験をもつ。特に財務省から派遣された柴田氏は、2011年末に当時の野田佳彦首相が訪中した際、日中金融協力の合意を実現した立役者でもある。政策当局者と直接、意見交換したり、交渉したりしたときの記録が本書の下敷きになっている。ふたりが12年までの4年間に作成した内部レポートは実に6000ページを超えるという。

欲を言えば、当局者の生々しい肉声や政策決定の舞台裏をもっと書き込んでもらいたかった。政策を決めている人たちの本音が浮かんでくれば、中国の経済政策が次にどう動くかを予想しやすくなるからだ。もちろん、普通は表にでない内部レポートの一端が明らかになっただけでも、本書の意義は大きい。中国共産党の経済政策がどのように決まっているのかを知りたい人にとって、必読の書になるのは間違いはない。

(日本経済新聞 政治部 次長
高橋 哲史)